

あなたの弱さは
幸せの力になる

KoZu

Kanna

神津 十月

An Incredible Power in Your Weakness

An Incredible Power in Your Weakness

あなたの弱さは
幸せの力になる

神津 十月

Kozu

Kanna

〈著者略歴〉

神津十月（コウヅ カンナ）

昭和33年、東京生まれ。幼稚園から高校まで東洋英和女学院に学ぶ。ニューヨークのサラ・ローレンス・カレッジ演劇科に留学し、昭和56年帰国。以後、ラジオやテレビの司会、雑誌のエッセイなど、多彩に活躍。

昭和57年に出版した第1作「親離れするとき読む本」は体験をもとにした家族論として話題になり、ベストセラーに。そのほか、エッセイ「今日もまた百面相」「女の魅力 IN&OUT」、小説「父に関する噂」「スターダスト」などの著書がある。

現在、労働省雇用審議会委員、税制調査会委員、「フォーラム・エネルギーを考える」メンバーなどを務める。

あなたの弱さは幸せの力になる

平成十二年七月十三日 第一刷発行

著者 神津十月
コウヅ カンナ

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ十四ノ一 〒一〇四—〇〇四五

電話東京（〇三）三五四二—九六七（代表）

FAX（〇三）三五四二—五四八四

振替口座 〇〇二〇—九—四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申し出ください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社（四〇）

製本所 大口製本印刷株式会社

© 2000 Kanna Kozu, Printed in Japan

ISBN4-7593-0630-7

あなたの弱さは幸せの力になる——目次

自分の弱さを認めるとラクになる

人のために役立てることに感謝—— 8

弱さが強さを生み、強さが弱さを生む—— 16

ロビーのライティングデスクで書く理由—— 23

十年前のキープ—— 27

幸せだと思える力—— 31

似合う似合わない—— 35

“かつこ悪い” 地味な勇気もある—— 39

考える力が思いやりの心を育てる

考える力が足りない—— 48

いい顔の奥にはたくさん心のひだがある—— 55

要領のいい人、悪い人—— 62

短所を先に、長所で締める—— 69

理不尽な叱責しつせきのおかげ—— 76

叶うも夢、叶わぬも夢—— 80

今の居場所を知る—— 87

プロとは責任を取るといふこと

無駄なものは何もない—— 96

客はだまされない—— 100

取るべき責任はみな同じ—— 103

誠意ある対応とは？—— 106

三流の価値—— 110

誰のため、何のため—— 114

悪戯いたずらの帰るところ—— 118

鑑賞のプロが芸術を磨き上げる—— 121

「生」の対極にあるもの—— 126

老いることはこの世にお返しをしていくこと

複眼のすすめ—— 132

祖母の返済計画—— 138

目的があるから気力が湧いてくる—— 142

三老介護の間—— 145

高齢家庭で男は変わるか—— 148

女の立場 嫁の仕事——152

女心は難しいです——156

祖父のお返し——160

自分の狭さを知ると、ひとの立場がわかってくる

世界には想定外がいっぱいある——166

曖昧を見極める——171

誰かが何とかしてくれる——175

見越したはずの「未来」の誤算——179

システムだけが変わらない——183

見えないものを見る——186

あえて不便も選択したい——189

夢を諦めなくていい——194

緻密で繊細、複雑難解な自然——198

ちよっと自分を鍛えると、人生は深くなる

最上の娯楽——204

少しばかりの配慮を	207
とりなしは女任せ？	211
私は安心基準の女？	215
男心がわかる女は切ない	219
オトコと携帯電話	223
知識は醗酵 ^{はっこう} して知恵になる	227
この土の力	231
ヒトの速度を忘れていませんか	235
心の糠床をかき回す	240
定点観測のすすめ	245
あとがき	250
初出一覧	252

ブックデザイン——磯部 裕
装画——大川 紀枝

自分の弱さを認めるとラクになる

人のために役立てることに感謝

“君のやさしさには自己満足的なところがある”

私は、比較的やさしい、思いやりのある人間だと自負していた。

長女で、忙しい両親に代わって妹や弟の面倒をみてきたことが習い性となったのか、頼まれごとをされれば、何でも引き受けてしまうし、少しばかり自分の時間や労力を費やすことになっても、それを惜しむ気持ちにはあまりならない。

だから他人からは、面倒見がいいとか、気配りがあるとか、やさしいとか言われ、そう言われればもちろん悪い気はしないから、自分でも何となくその気になっていた。

そんなある日のことである。食事中に私は、友人から意外なことを言われた。

共通の友人の窮地きゅうちを見かねて、私が一肌脱いだ経緯を話し終わった時、それまで黙って聞いていた友人が小さく溜め息をついて言ったのだ。

「君のやさしさってさ、けっこう自己満足的なところがあるよね」

私はカチンときた。

「どうのことよ、それ」

「いや、だからさあ、確かに相手のために何かをしてあげているんだろうけど、結局それは、自分の美学をまっとうするためって感じが、時々するんだよね」

彼は言いにくそうに、けれども驚くほどきっぱりと私に言つてのける。私は猛然と反論はんろんし始めた。

「何かしてあげて、それで少しばかりこちらの気分が良くなったら自己満足なの？ やさしくしてあげよう……と心掛けていることを実践したのに、それは自分の美学を遂行したにすぎないって言葉で片づけるの？ それじゃあ、あんまりじゃないの。もちろん私は神でも仏でも聖人でもないんだから、そりゃあ無垢むくな心でやってるわけではないけど、相手のことを思っているのは事実よ」

黙ってしまった彼の前で、私はひたすらに言葉を続けた。

「百歩譲ゆずって偽善でも、いいじゃないの。偽善でやさしくできるほうが、何もしないより少しはましでしょ？ あなたみたいに能書きばかり言つて、何もしない人っていうのが一

番始末が悪いのよ」

こちらもついつい興奮して、刃の鋭い言葉を投げつけてしまう。彼は苦笑して私を見た。「ごめんごめん。べつに君を批判してるわけじゃない。人に何かしてもらいたいってことばかり求めている人が多い中で、君みたいにしてあげてくれる人を喜べる人は、偉いと思ってるよ。ただ……、そこで立ち止まっているのは君らしくはないと思ってるだけ」

話はそこで終わり、気まずいまま私たちは店を出て、ほとんど会話をすることなく駅まで歩き、そしてそのまま別々の電車に乗った。

下り電車はまだ混んでいて、私は吊り革にぶら下がりながら、さっきの友人の言葉を思い返した。腹は立つのだが、何となく気になる。残念だが心の奥底が、どこかで彼の言葉を認めているような気もし始めていた。

自分への見返りを期待していいいか

ふと、昔聞いた仏教説話を思い出す。

それは地獄を釈迦が歩いている時のことだった。地獄に落ちた人々が、釈迦に向かって口々に「食べ物くれ！」と叫ぶ。釈迦はその言葉を聞き、大皿に食べ物を山のように盛

り、人々の前に置いた。そしてこう言ったという。

「食べても良いが、手掴みではいけない。この箸を使って食べるように」

差し出された箸は、重くて長い箸だった。人々は釈迦が歩み去るのを待ちかねて、箸に手を伸ばし、食べ物をお口に入れようとした。

ところが箸は長いので、食べ物をお箸の先が掴^{つか}んでも、遠くてお口に入れることができない。ならば箸の下のお口を持つて……と試みても、箸は重いので、今度は満足に操ることができないのである。人々が泣き叫んでいると、ある一人の老人が何事かを思いついた。箸で食べ物をお掴んだら、自分ではなく、目の前の人のお口に入れるのである。食べさせてもらった人は、もつと食べたいから、その人も箸で食べ物をはさみ、自分の口ではなく、目の前の他人のお口に入れる。

自分ばかりが食べようとしている時にはお口に入らなかった食べ物、人に食べさせることによって自分のお口に入る。人を思いやることが、結局は自分に戻ってくることにつながるのだ……というような話だった。

こういう戒めはキリスト教にもある。聖書には「自分がしてほしいと思うことは、人に

もそのとおりにせよ」という言葉がある。ごくごく基本的な「思いやり」の教えなのである。

けれども、あの仏教説話を聞いた時、確かその話をした人は、こんなことを付け加えていたのではなかったか。

「これは、思いやりは大切だという教えではありますが、もう一つ大切なことが隠されています。それは、人が誰かのために何かをするという行為は、所詮、自分への見返りを期待してのこと。仏の慈悲と同じだと思いついてはいけません……ということですよ」

友人はこのことを言っていたのだろうか。自分の行為を仏の慈悲と同等に扱ってはいけない。それは思いつきであると言いたかったのであろうか。

私は決して、人に何かをしてあげる時、具体的な見返りを期待しているわけではない。思っているが、でも心の底には、そうする自分を見て満足するとか、人の評価を聞いて満足するというような、精神的見返りを待っているところが皆無とは言いがたい。

私は窓の外に目を遣りながら、じつと考えた。聖書の中に、こんな言葉もあった。――
「人がその友のためにいのちを捨てること。それより大きな愛はない」

見返りを求めず、自分の身を投げうつことが愛というならば、私がささやかにしている

行為など、愛の足元にも及ばない。

人に何かをしてあげられることに感謝

私は胸が苦しくなった。

してもらうことを望むより、してあげることの喜びを感じられるほうがいい。偽善でも見返りを求めるような気持ちがあっても、やさしさを表さぬよりは、表したほうがいい。

けれども、それは第一のステップにすぎない。その上に、階段はずっと続いているのである。私はその階段があることに気づいていなかった。……いや、気づいていたのかもしれないが、面倒で、見ないようにしていたのかもしれない。

友人はたぶん、そういうことを言いたかったのだろう。

けれども、だとしたらいったい私はどうしたらいいのだろう。どんなふうにすれば、せめてもう一段、階段を上れるのだろうか。

帰宅後、私は思い余ってさきほど別れた友人に電話をした。

電車の中で気づいたことを素直に告げた後、どうすればいいのだろうと尋ねたら、彼は笑いながら言った。

「感謝感謝」

「えっ？」

「神や仏の愛はもちろんだろうけれど、たとえば……。植物はさ、あなたのために無償^{むしょう}で空気を提供してくれてるんだし、太陽はさ、何の見返りもなくあなたを暖めてくれてる。人は誰もみんな、気づいていないかもしれないけど、もの凄い『やさしさ』を与えられながら生きてるわけよ。それを思えば、君は誰かに何かをしてあげた時、きつと自己満足なんかしないと思う。むしろ、当たり前だと思っていた街路樹やこもれびに、サンキューって言いたい気分になると思う。偉そうなこと、俺も言えないけどね」

私は体中が温められたような気分だった。

その友人は二年後に亡くなった。

周囲の人のほとんどは知らなかったのだが、彼はずいぶん前から重い病を抱えていたという。もちろん私もそんなことはまったく知らなかった。

郷里に住む高齢のご両親に代わって、友人たちが彼のアパートの整理をした。そのうちの一人が、後日、私に電話をしてきた。

「彼の部屋は貼り紙だらけだった。テレビには『笑いに感謝』、流しの水道には『水に感